



視点 厚生省トップの交代

厚生事務次官が幸田氏から吉原氏に交代し恒例の新旧次官の「交代式」が七日午後、厚生省講堂で行われた。三十年余の厚生省生活を終えていま去りゆく幸田氏、代って厚生省のトップにたった前社会保険庁長官の吉原氏、職員を代表して新旧次官に謝辞と決意を述べた下村氏（新社会保険庁長官、前保険局長）と、三者三様の人柄と厚生行政に取組む姿勢がうかがえ、興味のある風景であった。

まず幸田氏は、「豊かな成熟した社会になったが、それに対応する新しい福祉像が国民の間に確立・定着しているだろうか」と疑問を呈し、「福祉国家論の否定とか超保守主義の台頭がみられることを危惧する」と述べ、道半ばで去る心残りを、「明敏で決断力に富む吉原新次官」に託した。

ついで吉原氏は、「第一に、大きな転換期にある厚生行政は、今後とも制度や内容の变革が必要で、痛みや反対が避けられないが、大胆に勇気をもって挑戦してほしい」としたうえで、「厚生行政の原点である生命・健康への尊厳、弱い、恵まれない人への思いやりは常に忘れないでほしい」と説き、「第二に、高齢化社会への対応は厚生省だけでは達成できず、他省庁との調整や地方公共団体・民間の役割が重要だが、主役となりリーダーシップをとっていくのは厚生省だ。大きな視野と

幅広い見識、柔軟な発想で取組んでいかねばならない」と述べた。

このあと下村氏は、幸田氏に対して「緻密でバランスのとれた思考と強力な指導力によって、二十一世紀へ向う厚生行政を展開した。国民医療総合対策本部の中間報告は、その思想の集大成である」とし、国保法の改正、年金積立金の自主運用、厚生行政の国際化への対応などを業績としてあげた。吉原氏に対しては、「初代の老人保健部長として老人保健法の創設に当り、児童手当の改革、年金制度の改革に毅然として立ち向った」ことに強い感銘をうけたと述べ、「新次官のもと、次の課題に一致団結して取り組んでいく」と結んだ。前次官を送り新次官を迎える厚生省の空気を、下村氏の挨拶は的確に表現したものであった。

幸田氏の前の次官・吉村氏は六十一年四月、高齢者対策企画推進本部の報告をまとめた。そして幸田氏が、国民医療総合対策本部の中間報告を昨年六月にまとめ発表したことはまだ記憶に新しい。いずれも保険・医療行政の路線を示すものとして今後も影響力をもちつづけよう。大きな足跡を残した両氏を引き継いで、吉原氏がどんな次官ぶりを発揮するか、厚生行政の新しい展開とともに見守りたい。

社会保険旬報 目次

視点 厚生省トップの交代

座標

給食の複数献立を実施する病院／高齢者世帯が増え高まる年金依存／在宅ケアモデル事業に十一市町／グリーンピア十三カ所がすべてオープン

論評

在宅医療を考える(上)

増子 忠道 4

再保険制度の充実と在宅療養の可能性を求めて——国保連の実践から②

入道 秀栄 6

潮流

医療機関の一月月当り診療報酬額

16

ニュース

厚生省・新幹部の主な略歴ほか

18

資料

医療機関別診療状況調(上)

25

通知

健保組合設立認可基準の一部改正

29

同・改正に伴う「健保組合設立認可基準の改正に伴う事務取扱いについて」の一部改正

29

前月の法令・通知から

28

病院経営の動向

29

業務委託のアンケート調査

31

医療費の動向

35

医科高額レセプトの半数は大学病院

37

本誌一〇六月分総目次

36

一六〇一〜一六一九号

37

編集室 ワード・カプセル